

報恩・感謝・恥を知れ―創立者が語る大妻教育の原点―

解説資料

5 『吾等の信念』

大妻良馬

大正十五年（一九二六）初版
（昭和五十四年復刻）

大妻女子大学博物館蔵

大妻良馬（一八七一一一九二九）が執筆した書籍。主に道徳の重要性を主張する。結論部分で、皇室尊崇・父祖への孝養（孝行を尽くすこと）などに加え、各自の職業につとめ励むことを説く。良馬は、自身の父母の道徳教育によりこれまで大過なく過ごしてきたことと述べ、大妻家で行われていた道徳教育を重視する信条が読み取れる。展示部分では、「恥を知る」といふ高尚な心の作用」と述べ、「礼儀は報恩道の一位置を占める」としており、良馬が「報恩」を重視していたことが分かる。

6 「婦人の処世五則」

『大妻時報附録ふる里版』第一輯

（『大妻時報』第二巻第一号【附録】）

大妻良馬

昭和三年（一九二八）一月十日

大妻女子大学博物館蔵

女性が社会で暮らしていく上で守るべき五箇条として、①貞操を守る、②穏健中庸の品性を陶冶、③婦人・妻・母として賢明有為な淑女である、④尊崇祭祀・孝養奉仕などの徳操を徹底、⑤家業・内職・外勤に努力精励し、家庭生活の向上に資する、を挙げる。

主に道徳的内容であるが、夫と死別した女性の再婚は否定しておらず、また女性が自ら生計をたてることも想定しているなど、現実的な観点も含まれている。

7 「理想は高遠に実行は足元から」

『大妻時報附録ふる里』第二巻第五輯

（『大妻時報』第二巻第八号【附録】）

大妻良馬

昭和三年（一九二八）九月六日

大妻女子大学博物館蔵

良馬が、病気からの回復途中に記した文章。「大妻学校の大理想」にむけて日々歩を進めていく意気込みを記す。

その際、自身の主義は、「理想は高遠に、実行は足元から」であるとし、理想への一歩一歩をしっかりと踏みしめてこそ、理想が実現する、と述べる。

8 「思想上の去華就実」

『大妻時報』第二巻第十号

大妻良馬

昭和三年（一九二八）十一月六日

大妻女子大学博物館蔵

「時間励行の修身講話に脂が乗って、次の教課時間が来て居るのに平気で講話を続けて、立派に時間励行を打ちこわした滑稽」などの話から、道徳が実行から乖離していることを指摘する。第一次世界大戦後の経済不況と革命運動の登場を、「経済国難」・「思想国難」とする風潮に對して、「思想上の華を去つて直に實に就く」ことを主張する。具体的には、明治天皇の勅語の通り、忠孝一本、義勇奉公の精神を貫くことを主張する。良馬の皇室への愚直な尊崇の思いが読みとれる。

9 「家庭平和の中心者」

『大妻時報附録ふる里』第六輯

（『大妻時報』第二巻第十号【附録】）

大妻良馬

昭和三年（一九二八）十一月六日

大妻女子大学博物館蔵

良馬は、「道徳は学問でもなければ理屈でもありません。人の心の道に叶ふた実行其のもの」とし、また「報恩犠牲の精神の表現、即ち人格の表れ」とする。加えて「実行に現れない道徳は何等価値もない」と述べる。「思想上の去華就実」（資料番号8）に続き、「百の高論卓説より

も、一の卑近ひきんな実行が遙かに尊い」として
いる。特に女子学生に向けては五項目の
反省要目を挙げ、実行を求めている。道
徳の実行こそを最重要とする良馬の考え
が分かる。

10 掛軸「我か思」(わがおもひ)

一心(大妻良馬)

昭和時代初期

大妻女子大学博物館蔵

一心は大妻良馬の号。この和歌は、私
立大妻芸芸伝習所設立から十周年とな
る大正十五年(一九二六)十月、良馬が
樂焼に書きつけたものであるという。良
馬の報恩を重視する思想が読み取れる。

【翻刻文】

我か思若し遂けすして 果てなんか
尊き恵に いかて答へむ 一心

【現代語訳】

私の思いがもしも遂げられずに果て
て(死んで)しまうだろうか。(そのよう
な時は、私が受けてきた)尊い恵にどのよ
うに答えようか。一心

11 「思想浄化と明治会」

『大妻時報』第二巻第六号

大妻良馬

昭和三年(一九二八)六月六日

大妻女子大学博物館蔵

天長節(同年四月二九日)に行った明
治会麹町支部発会式式辞の一部を転載
したもの。良馬はこの会の委員長を務め
ていた。

明治会では、道徳の実行力を涵養かんようする
ために、麹町区一万戸に対して明治天皇
の御製(天皇作の和歌)と日常生活での
実践要項を配布しはじめた、としてい
る。

良馬の文章の次には、明治天皇御製
(「よの中は たかきいやしきほどく」に
身を尽すこそつとめなりけり」と実践
要項も掲載されている。

12 「御即位拝賀式に於ける訓示―要項―」

『大妻時報附録白ゆり』第六輯

(『大妻時報』第二巻第十一号【附録】)

大妻良馬

昭和三年(一九二八)十二月六日

大妻女子大学博物館蔵

昭和天皇の即位式に合わせて行われ
た訓示。天皇は、我々の主であり、先生で
あり、親であると述べる。また、明治天皇
の発した教育勅語を初めとした詔勅(天
皇の発する文書)・沙汰(指令・命令)によ
って国民を教え諭している、としている。
また、明治天皇御製を引用し、臣民とし
ての責任・義務を説く。良馬が、御製から
道徳や教訓を読み取り、臣民として自己
反省することが責任であり、義務である
とする。

13 掛軸 御製「世の中は」

明治天皇

年代不明

大妻女子大学博物館蔵

内容は、「思想浄化と明治会」(資料番
号11)掲載のものとほぼ同文。大妻学院
には、明治天皇御製を掛軸に仕立てたも
のが複数伝来しており、良馬が作成を指
示したものと推測される。良馬が明治会
で行っていた御製を規範とした道徳推進
活動を、大妻学校においても行っていた
ものと思われる。

【翻刻文】

世の中は たかき(高)いやしき(卑)
ほとく(高)に みをつくすこそ
つとめなりけれ

14 掛軸「教育勅語」

川西呉城

昭和三年(一九二八)

大妻女子大学博物館蔵

明治二十三年(一八九〇)に発布され
た教育勅語を掛軸に仕立てたもの。

良馬は、「わが教育の根本主義として
尊皇愛国の精神を永久に伝える」ため、
教育勅語や戊辰詔書などを掛軸とし、学
校に宝蔵することを思い立ったという。
そこで書家の川西呉城に揮毫を依頼、昭
和三年秋、大妻学校へ掛軸が納められ

た。これらの掛軸は、講堂や貴賓室に掛けられたという(『大妻良馬追悼録』)。本資料はその時に制作されたと思われる、良馬が詔勅を重視し、大妻学校の生徒にも教え伝えていたことを示す資料である。

15 「自らを省みて

——幸福を求むる人々へ——

『大妻時報』第二巻第三号

大妻コタカ

昭和三年(一九二八)三月六日

大妻女子大学博物館蔵

コタカが、一生を良くするために、心の持ちようについて述べる。揺れ動く心の騒ぎを静め、人生の荒波を乗り切る力を養うことが「修養」であるとする。そして先人の教えを学ぶ際、「昔の人の教へをたより、自分で自分をかへりみて、常に心をただしき方向に取り直す」事が大切であると述べる。

また、結びの「日々己が心を省みる」という言葉は、校訓「恥を知れ」にも通じる内容である。

16 「入学式に於ける告辞(要項)」

『大妻時報附録しらゆり』第二巻第三輯

(『大妻時報』第二巻第五号【附録】)

大妻コタカ

昭和三年(一九二八)五月六日

大妻女子大学博物館蔵

四月七日に行われた入学式の式辞。コタカは、新入生とその父兄に対し、大妻の教育は、「精神教育」、特に「恩義の觀念を根底とした人物養成」に最も重きを置いていることを述べる。また、成績査定は操作(常日頃の行い)を重視することについても具体的に述べている。そして、日々気をつけるべき事として、①従順・諸規定遵守・時間厳守、②自治的精神の涵養、③正直・親切・快活・健康を挙げている。昭和初期の大妻教育の特色が分かる。

17 「せがれを奪る嫁になるな」

『大妻時報』第二巻第五号

大妻コタカ

昭和三年(一九二八)五月六日
大妻女子大学博物館蔵
嫁入りした女性に対し、義理の両親に奉仕することで家庭が円満になることを説く。その結果、新郎と嫁の青春が台無しになるようなことはないと述べている。
コタカは「忠孝」・「孝道」など道徳的な言葉も使っているが、外出の際まず親を誘う、なんでも進んで親に相談するなど、具体的にアドバイスしている。
後に紹介する、「家庭円満」にも通じる内容である。

18 「明るい家庭と暗い家庭」

『大妻時報』第二巻第七号

大妻コタカ

昭和三年(一九二八)七月六日

大妻女子大学博物館蔵

「わたくし達が一生を幸福に送るのも、不幸に送るのも、帰するところは、明るい家庭を作るか、暗い家庭を作るか」とし、明るい家庭・暗い家庭を作るのは難しいことではなく「その人の心掛如何による」としている。そして、家庭が明るくなるか、暗くなるかの条件について箇条書きで列記する。そこでは、夫婦・子供・老人など、互いに尊重することなどが記される。

「せがれを奪る嫁になるな」(資料番号17)と同様、家庭を円満にするための具体的でわかりやすい内容である。

19 「暑中休暇を前にして」

『大妻時報附録しらゆり』第七巻第四輯

(『大妻時報』第二巻第七号【附録】)

大妻コタカ

昭和三年(一九二八)七月六日

大妻女子大学博物館蔵

夏の休暇前、コタカが学生に向けての注意している。「可憐の少女」に忍び寄る「軟派の不良」の「魔手」に対して、①混雑した電車にはなるべく乗らず、男子に対応しない、②夕方・夜間に一人で外出しない、③知らない男に笑顔を見せず、知った男子でも不審な点があれば両親に相

談する、④男子から物を借りず、同性でも不良とは親しくしない、⑤華美な服装で外出しない、など、事細かに注意点を記す。

20 「可愛がられる嫁になるには」

『大妻時報』第二巻第八号

大妻コタカ

昭和三年（一九二八）九月六日

大妻女子大学博物館蔵

嫁に入った後の夫の矯正方法、夫・姑との接し方などについて具体的に述べる。「強く、晴れやかに生き伸びて夫の陰に寄りそつてゆくところに真に妻たる誇りと喜びとがある」の記述に、まず夫を立て、夫を活かすというコタカの考えが見える。

また、「努力をする者は一生多忙であり、一生幸福」の言葉に、勤労を重視するコタカの考えが読み取れる。

21 色紙「恥を知れ」

大妻コタカ

年代不明

大妻女子大学博物館蔵

コタカが色紙に記した校訓「恥を知れ」。「恥を知れ」とは、他者に言うものではなく、人に見られたり聞かれたりした際、恥ずかしくない行い・振る舞いであるかどうかを自分自身で戒める意味である。コタカはこの言葉の意味を折に触れて述べている。

22 『設立十周年記念

大妻学校の過去と現在』

大妻学校同窓会

大正十五年（一九二六）

大妻女子大学博物館蔵

十周年記念に際して出版された書籍。

ここに掲載された「生徒心得」（大正十四年三月制定、同翌十五年九月修正）によれば、廉恥を重んじ名誉を尊ぶ精神は古来日本の武士道の中心思想で、婦女子であつても発揮した事例があるという。しかし近年は権利を主張し義務をつくさな

いなど、憂うべき風潮が大勢を占めている。しかるに校訓「恥を知れ」は現在のあらゆる道德の欠陥を救うに足りる標語であるという。校訓が重要であるという認識が読み取れる。

23 「今年卒業する生徒諸子へ」

『大妻時報附録しらゆり』第八巻第二輯

（『大妻時報』第三巻第三号【附録】）

大妻コタカ

昭和四年（一九二九）三月六日

大妻女子大学博物館蔵

コタカが卒業生へ向け、進学・就職・結婚とそれぞれの進路に際し、「自己の職務に対する熱心な研究心」、「社会に対する周到な洞察力」、「身体の壮健」の必要性を述べる。一方で「平素、「恥を知れ」との教訓を朝な夕なに聞かされて、肝に銘じて居る筈の大妻魂の持主である皆様」との記述から、校訓が繰り返し教えられていたこと、そしてこの校訓を刻み込んだ者が「大妻魂」の持ち主であるとの認識が読み取れる。

24 『大妻コタカ先生追悼録』

学校法人大妻学院

昭和四十五年（一九七〇）

（昭和五十四年復刻）

大妻女子大学博物館蔵

昭和四十五年一月三日に没したコタカへの追悼録。大妻女子大学家政学部に在学中（当時）の久保田享子氏が、晩年のコタカとの思い出について語っている。そこでは、「恥を知れ」これは人に言うのではなく、自分の心に言うものだと、何回も、何回もお会いするたびにおっしゃった先生」とあり、晩年のコタカが校訓の本当の意味を、繰り返し繰り返し在校生に伝えていたことが分かる。

25 『大妻良馬追悼録』

大妻学校編集部

昭和四年（一九二九）

大妻女子大学博物館蔵

昭和四年三月十七日に没した良馬への

追悼録。そこに掲載された高等女学校在校生の早川氏が執筆した生前の良馬について語った文章。

第一回の明治会が、大妻の講堂で行われた際、生徒達は嬉しさに大変騒ぎ回っていたが、その際、良馬はただ一言「バンドの裏をござんなさい」と言っただけという。そこには「恥を知れ」の四文字があり、はつきりと彫られた字を見た時の気持は今も忘れられない、と述べている。

26 大妻高等女学校和服制服バックル

大妻女子大学博物館蔵

制服が和服であった時期に使用されていたベルトのバックル。

人に見せるためでなく、自分が刻まれた文字を見て、自身の行動を省みるために、他人からは見えないバックルの裏面に、校訓「恥を知れ」が刻まれている。『大妻良馬追悼録』（資料番号25）で生徒が着用していたものと同型と思われる。

27 大妻学校十周年記念文鎮

大正十五年（一九二六）十月

大妻女子大学博物館蔵

大妻学校十周年記念式の際、作成された文鎮。「大妻高等女学校和服制服バックル」（資料番号26）と同様、通常は人目につきにくい底面に「恥を知れ」が刻印されている。

28 扁額「恥を知れ」（写真）

東郷平八郎

大正十三年（一九二四）

大正十三年夏、大妻良馬は東郷平八郎（海軍大将・大妻学院近隣に居住）に依頼し、校訓「恥を知れ」を揮毫してもらっていた。

この扁額は大妻学校の玄関に飾られていたが、現存していない。

29 掛軸「生徒訓練の方針」

土屋久代

大正十一年（一九二二）

大妻女子大学博物館蔵

大正時代の大妻学校における指導方針を記したもの。校訓「恥を知れ」が、大妻家の家訓に由来することが記される。また、「恥を知れ」が、「修徳上の第一義」であるとして、大妻教育において最も重要とされていたことが分かる。

【翻刻】

生徒訓練の方針

本校は、大妻家に於ける父祖の家訓、恥を知れを以て修徳上の第一義となし、至誠を以て自己の本分を尽し、公明正大にして和衷協同、質実勇健、沈着にして機敏快活、貞淑温雅の徳を養成せむことを期すべし

30 掛軸「恥を知れ」

鳩山一郎

大正十五年（一九二六）初版

大妻女子大学博物館蔵

鳩山一郎（大正、昭和時代の政治家、号：楽山）が大妻コタカに宛てて揮毫した書。大正六年（一九一七）に制定された大妻の校訓「恥を知れ」を揮毫している。

鳩山は、昭和七年当時文部大臣を勤めていた。その関係から、コタカが鳩山に、揮毫を依頼したものと推測される。

31 掛軸「大妻学校校歌」

大正時代（一九一二～二六）頃

大妻女子大学博物館蔵

大正六年（一九一七）に制定された旧校歌の歌詞。大正十一年頃から昭和二十年（一九四五）まで、朝礼時に歌われていた。

二番の歌詞では、校訓「恥を知れ」を忘れないければ、教えの道で迷うことはない、とある。大妻で勉学に励む上で、校訓は最も重要な教えであり、大妻の学生・生徒達が迷わないための道しるべであった。

34 「品物から時間の経済へ」

『現代乃婦人』第四巻第一号

大妻コタカ

昭和五年（一九三〇）一月一日

大妻女子大学博物館蔵

コタカが、金銭の経済、節約のみでなく

時間の経済・節約について努力することについて述べる。時間をかける価値と消費した時間を考えて行動することを勧める。一方で、趣味・休養のための時間は無駄な時間ではないと認めており、「働くべき時にはその仕事に対して秩序よく働いて空虚な時間を作らないこと、そして休む時には十分に休むといふ様に自覚ある時を送らなければならない」と述べており、現代にも通じる内容である。

35 「お台所を完全に主婦の手に握れ」

『現代乃婦人』第四卷第二号

大妻コタカ

昭和五年（一九三〇）二月一日

大妻女子大学博物館蔵

台所を「生計の大部分を占むる処であつて、家庭経済の根原点」ととらえ、健康・衛生の点からは「一族の生命を依頼されてゐる重要な場所」と捉えている。その上で、家庭婦人は、家庭を国家社会の大きな事業の源動力とすることができるとしている。そのため、台所の仕事を完全に主婦（家庭婦人）に取り戻し、婦人の本来の責務を果たすべきことを主張する。

36 「婦人は果して消費者か」

『現代乃婦人』第四卷第九号

大妻コタカ

昭和五年（一九三〇）九月一日

大妻女子大学博物館蔵

男性が外で金を稼ぎ（生産）、女性がお金を使う（消費）という見方に対し、コタカは、反論を行っている。それは、一見消費のみをしていると見られがちな主婦の生活は、家庭で「明るい生活」をする点からすると、婦人の家庭内の仕事は真の創造であるとする。実は莫大（ばくだい）な生産であり、お金に換算できない無限の生産を含んでいる、と主張している。

37 「何を第一に節約すべきか」

『現代乃婦人』第四卷第十号

大妻コタカ

昭和五年（一九三〇）一〇月一日
大妻女子大学博物館蔵
日本の不景気に対し、婦人だけでも身近なところで節約をすべきと述べる。身近な布や野菜の節約が、国家財政への寄与、そして失業者への同情になる、としている。最後に「節約といふことは物質的問題に止まらず、精神修養の上からも大きな意味を持つて居ります」と述べている。

38 「家庭第一主義」

（『ふるさと』九号）

大妻コタカ

昭和三十二年（一九五七）一〇月一日

大妻女子大学博物館蔵

結論で「結婚生活に入つた上は私は家庭第一主義として先ず円満な家庭造りそれからそれぞれの能力に応じて各方面への進出後第二義的に考え度いと思ひます」と述べているように、結婚した女性が家庭に入っていく時、幸福に過ぐすには、「よい妻」として、夫婦二人で共同して円満な家庭を造り、そこから「よい主婦・よい母」として各方面へ進出することを主張する。

39 「あしたへの幸福」

『ふるさと』十号

大妻コタカ

昭和三十三年（一九五八）三月一日

大妻女子大学博物館蔵

女性は、「よき母・よき主婦」が優先となつてしまい、「妻としてはとかく事務的になりがちで、自分の身の廻りなどは少しも構わない、所謂、糟糠（そうこう）の妻」となつてしまうことは良くない、とコタカは述べている。女性が、日々仕事に追われながらも、どうしたら家庭を明るく円満に持ち続けることができるのかについて絶えず心に置いておきたい、としている。また、自身が健康であることも大切であるとしている。

40 掛軸「仲よき家庭はうつくしきかな」

大妻コタカ
昭和四十年（一九六五）頃
大妻女子大学博物館蔵

コタカが、六十年以上にわたる教育者としての人生を経て、八十一歳の時に記した書。コタカは家庭生活の充実を重要視してきたが、この掛軸においても家庭の円満を説いている。

掛軸右上には落款「和楽」（なごやかに
楽しむこと、互いにうちとけて楽しむこと）が捺（お）されており、人の和を重視するコ
タカの思いが読み取れる

41 「感謝の生活」

『ふるさと』一号

大妻コタカ

昭和二十八年（一九五三）七月二十日

大妻女子大学博物館蔵

昭和二十八年一月二十日、ラジオ東京で放映された内容を採録したもの。

「感謝とか、有難い（ありがた）とか云う事は決して強制的ではなくつて、極く有の俛（ま）の感情から流れ出る気持だと思えます。」と述べ、若い時期には、不平・悩み・苦しみがあったものの、今は感謝の日々によって穏やかな心の豊かさが持てるようになり、そして他人の真実と愛情を素直に受けられるような気持ちができる、と述べている。

コタカが、年を重ねて「感謝」を感じられる境地に達した事がわかる。

42 「御挨拶」

『ふるさと』十一号

大妻コタカ

昭和三十四年（一九五九）一月十二日

大妻女子大学博物館蔵

当時七十五才のコタカが、昭和三十三年十一月一日に行われた学院五十周年記念式典で行った挨拶。

学院の歴史を振り返り、「私は「幸福は感謝にあり」という気持で毎日を過ごして居ります。「幸福は感謝にあり」ほんとうに感謝の日夜（ひよ）います」と繰り返し返

し感謝することで幸福になれる、と述べている。

43 色紙「感謝」

大妻コタカ

年代不明

大妻女子大学博物館蔵

コタカが揮毫した色紙。

揮毫を依頼された際、「感謝」という言葉を選択していることで、コタカがこの言葉を大切に思い、そして他人にもその重要性を伝えようとしていたことが分かる。

44 扁額「めがさめて」

大妻コタカ

昭和四十年（一九六五）九月二十三日

大妻女子大学博物館蔵

当時八十一才のコタカが記した書。毎朝目覚めとともに、今日一日を過ごせることを喜び、自身の行動を戒め、他人の善意に感謝しながら一日一日を過ごすべきことが記されている。

晩年を迎えたコタカが、毎日自己を律しながら、また、他者への感謝を重視していたことがわかる。

【翻刻文】

めがさめて 見ればうれしや今日もまた

この世の中の人とおもえば

今日一日腹を立てぬこと

今日一日うそをいわぬこと

今日一日わるくちをいわぬこと

今日一日何事も善意にかんし（感謝）やすること

昭和四十年九月二十三日

大妻女子大学々長

大妻コタカ

八十一才

47 「人の長所を活かす心（二）」

（『大妻時報』第三巻第六号）

大妻コタカ

昭和四年（一九二九）六月六日

大妻女子大学博物館蔵

自分がずっと見ているから相手がこちらをずっと見ているのが気になる、とのた

とえから、他人の欠点が気になるのは、自分の短所は棚に上げて人の短所を見て暮らすからであると述べる。そして、人と交友する際は、先方の長所ばかりを見ることで、世の中は面白く、のんびりとしたものになってくる、と述べている。

自分の心がけひとつで、人間関係が良好になる、とコタカは主張している。

48 「多弁と寡黙(一)」

『大妻時報』第三卷第七号

大妻コタカ

昭和四年(一九二九)七月六日

大妻女子大学博物館蔵

しゃべりすぎる人への注意について述べる。

「言葉多きはしな^(品)少し」と述べ、「腹の底から出る真実のこもった言葉には、一言半句の短い言葉でも、忘れられない長い生命がございます」と言葉数が少なくても真実にあふれ、人を活かそうとする慈愛に満ちているとしている。最後に「舌の廻るに委^(まか)せて、徒^(いた)に人をけなしたり、不当に人を喜ばせることは、寧ろお話の乱用でありまして、お互に慎まなければならぬことであります。」と戒めている。

49 「口の人より手の人に」

(『大妻時報』第三卷第九号)

大妻コタカ

昭和四年(一九二九)九月六日

大妻女子大学博物館蔵

自身の発言が実行を伴わない事への警告。

近年社会では、口先ばかりの物知りが多く、口達者な人ほど何もしない、という。そこでコタカは、「喧まし屋にならないで、静かな実行家になつて頂きたい」と述べる。

なお、「時間^(れいじ)励行の修身談が、長談義になつて、次の課業時間まで喰ひこんで、時間不励行の実例を示す結果に終わつたといふお話」は、約十ヶ月前に刊行された良馬の文章(資料番号8)と同内容である。

50 「現代の若い女性に申し上げます(一)」

『現代乃婦人』第四卷第四号

大妻コタカ

昭和五年(一九三〇)四月一日

大妻女子大学博物館蔵

コタカが最近の若い女性に感じる傾向として、奉公や縁談に際し、あまり働かないで体裁良く生きようとしていると感じている。それに対し、「神様は私共の身体や精神を、使へば使ふほど、益々健康に、そして敏捷^(びんしょう)になるやうに作つて下さいましたのに、之を逆に使つてなるべく使はない様にいたしますと、健康を害していつも気が重く一生を不愉快に暮らさねばならぬやうになる」と述べ、働くことで健康に、そして幸福に暮らせることを述べる。

51 「現代の若い女性に申し上げます(二)」

『現代乃婦人』第四卷第五号

大妻コタカ

昭和五年(一九三〇)五月一日

大妻女子大学博物館蔵

女学校を卒業した女性に対し「今日、女学校を卒業したといふことは、女子としての学問を一通り卒業したといふ意味ではなく、将来女子として生きて行くについて必要な知識をこなし得る丈^(だけ)の基礎を修得したといふに過ぎないのであります、その修得した知識の真価を発揮いたしますことは、寧ろ、これからであります。」と述べ、社会に出てからも時代の進歩に遅れないように、つねに向上することの重要性を述べている。

52 「暗夜の石」

『現代乃婦人』第四卷第六号

大妻コタカ

昭和五年(一九三〇)六月一日

大妻女子大学博物館蔵

暗夜、道に置かれた石への対応から、真に道徳を実行する人について述べる。「誰^(たれ)れの目にも付かない暗夜の石を除く心掛^(こゝろがけ)がある人が、真に道徳を実行する人であるとしている。

わかりやすい寓話^{くわうわ}のたとえから、道徳心について述べている。

53 「打出の小槌」

『現代乃婦人』第四卷第七号

大妻コタカ

昭和五年（一九三〇）七月一日

大妻女子大学博物館蔵

簗・笠・鍬^{かきくわ}の寓話を事例に、成功するためには好運や不思議な力ばかりでなく、「粒々と積み上げて行つた根気」の重要性を述べる。「理想は高遠に実行は足元から」（資料番号7）にも通じる内容である。

54 「朝顔」 『現代乃婦人』第四卷第八号

大妻コタカ

昭和五年（一九三〇）八月一日

大妻女子大学博物館蔵

江戸時代の俳人・千代女（一七〇三～七五）の句を引き、そこに草木の生命を延ばしてやりたいという親切心を読み取る。そして、人を育てるためには、お金を施したり盲目的に愛するより、向上心・独立心を延ばしてやること、とする。

55 「雑念を排して」

『現代乃婦人』第四卷第十一号

大妻コタカ

昭和五年（一九三〇）十一月一日

大妻女子大学博物館蔵

浅草公園の一匹の猿、そして庚申塚の三匹の猿をたとえに、外界の刺激にとらわれない、平静な心を保つ必要性について述べる。その方法について、坐禅・静坐という精神統一法もあるが、「私共の心が、一つの希望に充ちて居ります時、私共は、外界の下らぬ刺戟^{しげき}に屈^{くつ}たくする隙もございません」と述べ、強い理想を持つことを勧めている。

56 「昭和五年を送る」

『現代乃婦人』第四卷第十二号

大妻コタカ

昭和五年（一九三〇）十二月一日

大妻女子大学博物館蔵
不景気・失業・葬儀・休業など、日本の不況状況に対し、フォード自動車会社の創立者・フォード(Henry Ford、一八六三―一九四七)の格言を引き、失敗・逆境は悲観すべきものではない、と述べる。

57 「昭和六年を迎えて」

『現代乃婦人』第五卷第一号

大妻コタカ

昭和六年（一九三二）六月一日

大妻女子大学博物館蔵

新年を迎えて、今年も想定される困難を乗り越えていくために、「笑ひこそ人の心を平和に、いつも春のごとくなごやかに、そして心に余裕を与えてくれるもの」そして、笑いを惜しみなく使つて難関を切り抜けたいと述べる。コタカがたびたび述べる、笑顔の重要性について述べている。「昭和五年を送る」（資料番号56）に引き続き、困難な時勢においてとるべき姿勢に言及している。

58 「ほがらかさが欲しい」

『現代乃婦人』第五卷第六号

大妻コタカ

昭和六年（一九三二）六月一日

大妻女子大学博物館蔵

合理化、経済的・能率的が重視される社会に対して、「理性偏重の冷たい人たちが醸^かし出す世の中といふものが、如何^{いか}に冷酷な殺風景なものであるか」と、警告を発する。それに対し、「今少し所謂^{いわゆる}無駄な方面をも尊重して、もつとほがらかな、のんびりとした気持で国民一般が老^{おい}も若いも、男も女ももつと高尚な趣味を楽しやうにあり度^たい」と、情操生活の重要性を主張する。当時の社会の風潮に対して、少し立ち止まるように述べている。

59 「明るい生活を望まるるならば」

『現代乃婦人』第五卷第八号

大妻コタカ

昭和六年（一九三二）八月一日

大妻女子大学博物館蔵

女性達が自身の境遇・環境に対して「侮辱」「奴隷的」などと語るのに対し、無闇に理屈ばかりを並べて、自ら憂鬱になり周囲をも暗くすることは「拙い生き方」であるとしている。まして「主婦の犠牲的精神」がなくては明るい家庭は望めない、とする。その上で、「真実に自己の精神を、物質から解放したいならば、につこり微笑んで犠牲に甘んずる丈の覚悟が必要」と述べる。コタカの自己犠牲的な姿勢が明確にわかる内容である。

60 「魂の曙へ」

『現代乃婦人』第五卷第十号

大妻コタカ

昭和六年（一九三二）十月一日

大妻女子大学博物館蔵

現在の「暗い世相」は、「物質文化を過重視して、魂の反省を忘れた者が当然受けなければ成らない結果」であったとしている。その上で、「華やかな文化に眼を閉ぢ、静かに魂を掘り下げて行く」ことを主張する。コタカが当時の風潮に危機感を持っていることがわかる。

61 「人間の生活と大きな関係をもつ 話上手と聞上手（一）」

『現代乃婦人』第五卷第十一号

大妻コタカ

昭和六年（一九三二）二月二日

大妻女子大学博物館蔵

話が續かない人へのアドバイスとして、新聞や雑誌などを読み、多方面のことに興味を持つようにすると良い、と述べる。一方で、「二時間も三時間も立て続けに饒舌り散らされますと、もう気がボーンといたしまして」と、あまりに多弁な人へも注意をしている。人付き合いする上で実践的な内容である。

62 「日々の思ひ」

『ふるさと』三二号

大妻コタカ

昭和二十九年（一九五四）十月十八日

大妻女子大学博物館蔵

一人の人間の内にある、母・妻・同僚・先生など多くの役割において「らしくありたい」という心構えを意識的に持つことで、「らしく」とはどういうことが考え、また、新しい発見、反省、工夫、発憤も生まれてくるという。そして、単なる情性で過ごしていた自身の心が生き生きとなり、その誠意が相手にも通じて、自身も周囲の人も幸福となる、と述べている。

63 「みんな美しく」『ふるさと』三十二号

大妻コタカ

昭和三十四年（一九五九）三月十五日

大妻女子大学博物館蔵

コタカは、「日本一の心の美人」になるために、円満な人格を創りあげる努力をし、勉強し続けたいと祈ったという。この努力は現在も毎日続けているという。

コタカはまた、いつも若く・美しくいるため、「せめて身だしなみだけでも先づ調べてゆきたいと思います。それに豊かな心を盛り、生き生きとした日常生活の間に、いろいろの苦しさを乗り切れる心の準備をしたいものです」と述べている。

64 「ほめあいたい」

『ふるさと』十四号

大妻コタカ

昭和三十五年（一九六〇）三月十五日

大妻女子大学博物館蔵

自身の笑顔を褒められたことをきっかけに、昭和三十五年は終始笑顔で暮らすことを心がけることを決めた、と述べる。「ほめられて、向ッ腹をたてて、一日不愉快だつた等という人はいませんし、ほんのさりげない言葉一つで、その日一日が明るくも暗くもなるものだと思えば、ほめ合う事は生きた宝石とも云えます」と述べ、人間関係を円滑にするために、ほめあうことを勧める。

資料解説：青木俊郎
（大妻女子大学博物館 学芸員）